潮音寺だより

第304号
平成21年2月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

撮影：超空正道

人は
他人を
汚(きたな)い言葉で
辱(はずか)めることで
己(おのれ)に棲(す)みつく
不満虫(ぐずぐずむし)の機嫌(きげん)をとり

また　人は
他人に
汚(きたな)い言葉で
辱(はずか)められることで
傷つく己(おのれ)の不満虫(ぐずぐずむし)に
身も心も蝕(むしば)まれる

怒(おこ)るなかれ
怨(うら)むなかれ
忍(しの)ぶがよい

さすれば　やがて
不満虫(ぐずぐずむし)は蛹(さなぎ)となり
羽ばたくときが来る

般若波羅蜜 ④ 忍辱

映画などで、悪役が牢獄から解放され、「やっぱり、娑婆の空気はうめぇなあ」などという台詞を吐くのを耳にされたことがあるかと思います。そこでの「**娑婆**」は、牢獄・軍隊・遊郭など自由を束縛された世界ではない外の世界、つまり、「世間」といった意味で使われますが、「娑婆」は本来、サンスクリット語 Sahā（サハー）を音写したもので、「忍耐」を意味する言葉です。そこで、「**忍土**」とも訳され、仏の世界「**浄土**」に対して、われわれが住んでいる苦しみ多い現世のことをいいます。

つまり、この世は、欲を持った衆生の集まりですから、程度の差こそあれ、それぞれがてんでに自分勝手な言い分で生きていますので、互いに傷つけられたといいつつ、相手を傷つけて、夏目漱石の『草枕』の冒頭にありますように、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」ということになります。

われわれは、よほど腹の据わった者でないかぎり、人の噂や風評を結構気にしながら生きています。ところが、「人の口に戸は立てられぬ」という諺にもあるように、世間の口はうるさいもので、「心穏やかに」とは思っても、なかなかうまくいきません。釈尊は、次のように仰っています。

『法句経』二二七番

アツラよ　（＊弟子の名）
こは
古より謂うところ
今日に始まるにあらず
「ひとは黙して座するをそしり
多くかたるをそしり
また
少しくかたるをそしる
およそこの世に
そしりをうけざるはなし」

おそらく、アツラというお弟子が、人からの悪口を気にして悩んでいたのでしょう。

「世間の人は『あいつは黙っていて何もしゃべらない』といってはそしり、逆に『おしゃべりだ』といってはそしる。また『いうべきこともいわない』といってはそしる。結局のところ、どうにもこうにも、何をしようが、そしりや非難は免れないものだ。これは昔からちっとも変わっていない。今に始まったことではない」と諭しておられます。

ですから、人の噂や風評に一喜

一憂することはつまらないことですが、だからといって、「耳をふさげ」ということではありません。悪口や辱めを、善意の忠告と受け止め、耐え忍ぶことが大切なのです。それを、「**忍辱**」といいます。釈尊でさえ、提婆達多という人物にはずいぶん難儀させられたと仏典にはあり、偉大な宗教家しかり、歴史に名を残し偉業を達成された方々、全部が全部、この忍辱波羅蜜を実践された結果であるといっても過言ではありますまい。

そして、忍辱波羅蜜を実践するにあたって、最大のポイントは、「怨み」の感情をどうするかにあります。釈尊は、次のように仰っています。

『法句経』五番

まこと、怨みごころは
いかなるすべをもつとも
怨みを懐くその日まで
ひとの世にはやみがたし
うらみなさによりてのみ
うらみはついに消ゆるべし
こは易らざる真理なり

「どんな手だてをしようが、自分が怨みを懐いているかぎり、敵対関係がなくなることはない。しかし、自分が怨むことを止めれば、敵対関係は消えてなくなる。これは変わることのない真理である」というのです。

確かに、人間関係はもちろん、国と国との関係においても同じで、近年のイスラエルとパレスチナにおける紛争は、怨みの行動が新たな怨みを生むということの繰り返しで、その報道を見るにつけ、聞くにつけ胸が痛みます。

ところがどっこい、他人事でなく、かつて、日本も先の大戦の折、多くの国に怨みを買う行為をいたしました。そして、敗戦、昭和二十六年サンフランシスコ講和条約会議において、各国が日本の責任を追及する中、セイロン（現スリランカ）代表は、釈尊のこの言葉を引用して、「憎悪は憎悪によって取り除かれることはない。だから我が国は、賠償を日本に求める権利はあるが、請求するつもりはない」と演説されました。

このような事実があったことは、あまり知られておりません。われわれ仏教徒として、人間関係の調和、大きく世界平和を考えるとき、このエピソードと共に、繰り返し、繰り返し二二七番と五番の法句経を噛みしめて、忍辱波羅蜜を実践していこうという心構えを持ち続けたいものであります。

◎阿弥陀にかぶる

帽子を極端に後頭部に傾けてかぶること。かつては、いささか不良っぽく、ちょっぴり小意気なかぶり方とされたものだ。それがどうして「**阿弥陀**」なのか？

理由は、阿弥陀様の後光（光背ともいう）にある。後光は阿弥陀様の肩に放射状に放たれているが、昔の傘を阿弥陀にかぶると、傘の骨があたかも後光のように放射状に見えた。そこでついたのが、この名前。かつては人力車の幌も、骨が開く様子から阿弥陀と呼ばれたというから、これは単なる放射状の線が連想のもとになって生まれたことばなのだ。

同様の語源から生まれたのが「**阿弥陀くじ**」。昔は紙に放射状に線を引き、その一端に当たりくじを書いて隠しておいたのが起源。単純かつ素朴な連想ではある。

◎頭陀袋

「**頭陀**」とは、梵語のドゥータの音を写した語で、衣食住に関するいっさいの欲望を捨てるための修行のことをいう。そこには十二の生活規範が設けられ、「**十二頭陀行**」と呼ばれるが、代表的なのは、ボロ布を着、托鉢食を食べ、森林で暮らすという衣食住の教え。

この修行の際、僧侶が首にかけて持ち歩いた粗末な布製の物入れが「**頭陀袋**」と呼ばれるようになった。現在、禅僧の僧侶たちは、この頭陀袋の中に、お経や数珠、お布施としていただいた物などを入れて歩いている。色は茶、あるいは黒。ところが東南アジアの僧侶たちの頭陀袋は、赤、黄、青の原色が用いられているというからおもしろい。

そこから転じて、現在では何でも入るだぶだぶの袋を頭陀袋と呼ぶようになった。

（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼ご寄付　感謝!!

次の方からご寄付を頂戴いたしました。受付用机二脚・椅子四脚・写経机二脚を購入いたしました。感謝申し上げます。

・小島卓司様　十万円
・奥津　潔　様　十万円

▼八十半ばの手習い

当方の大御庫裡が、このところ水墨画に燃えております。玄関に展示中。希望者に進呈とのこと、宜しく。

◆古町並み門には新た追儺札　沐魚